

めーりんの休日ぶら飯 グルメ

紗夜絶狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅魔館の門番である紅美鈴。彼女の楽しみは、月に何回かあるうちの1日休日に、幻想郷のグルメをぶらぶらと巡ること。

略して「ぶら飯グルメ」

幻想郷に眠る新たなグルメを食べるべく、美鈴のぶら飯が始まる。

※意外と食にはこだわり？のある紅美鈴の休日ぶら飯グルメを描いた話になります。

○東方Projectの二次創作小説になります。

○弾幕などは登場しません。

○原作との設定が異なる場合がございます。

○登場するお店や人物は全て幻想入りした架空のものになります。つまりフィクションです。

○作者独自の解釈などが含まれています。

○他にも多数ありますが、読んでいただけたら嬉しいです。

●誤字脱字などございましたらお伝えしてくれましたら、早急に対処致します。

目次

第1話	自分好みの天井	1
第2話	太陽のパンケーキセット	8

第1話 自分好みの天井

「ん、昨日は大変な目に遭いましたが、今日は霊夢さんに教えていただいた、人里で行列のできると噂の天井屋さんに行くぞ」

仕事の疲れを口に出しながら昼過ぎの人里を歩く美鈴。余程の激務だったのか、お腹の虫は食べ物求めて音を鳴らす。

「ぐぬぬ、早く食べたいですがいくら歩いても霊夢さんの言っていた行列なんて見当たらないですね」

人里を歩いてかなり経つが、目的の天井屋が見当たらないどころか、目印になりそうな行列すらどこにもない。霊夢に騙されたのではないか？そう考えが脳裏を駆け巡る中、近くの路地からワイワイと賑わう「気」を感じ取った。

その路地に向かうと、小さな店の前に数人の行列が出来ていた。私は列の最後尾の男性に聞いてみることにした。

「すみません。実は行列の出来ると噂の天井屋さんを探していて、もしかしてこのお店ですかね？」

「ああ、その噂の天井屋ならここで間違いないぜ」

「どうやらここで間違いないみたいだ。すぐさま列に並び順番を待つ。」

数十分後、「お待ちせしました、お次のお客様どうぞ」と元気のいい女性店員の声が聞こえた。声に反応し店に入店する。

かなり使い込まれているだろう赤い暖簾をくぐり中に入ると、少し広めの店内に、カウンター席と座敷席が2つあり、どちらもお客様で埋まっている。そしてカウンター越しの厨房では、渋い感じの店主の男性が忙しく天ぷらを揚げている。

私はちようど空いた一番壁寄りのカウンター席に案内され、着席してすぐにメニューを手に取り、吟味していく。スタンダードな海老天丼に始まり、野菜天丼、白魚や山菜など色々ある中、一つの丼に注目した。

「あなた好みの天ぷらを4つ選んで、オリジナルの天丼を作ろう！次の30種の中から選んでね」

メニューの1ページにデカデカと書かれた宣伝文句に惹かれて、カスタム天丼の注文を決めた。そしてカスタムする天ぷらを選んでいく。

「悩みますね、海老もいいですが・・・、よし決めました」

「すいませーん、注文してもいいですか？」

「この声に反応した店員が注文を伺いに来る。そしてすぐさま注文する。」

「このカスタム天丼を1つ。天ぷらは、卵、レンコン、鶏、タケノコでお願いします」

「かしこまりました。1つ1つ丁寧に揚げる為、少々お時間がかかりますのでお待ちくださいませ」

私は隣に置いてあった文々。新聞を読みながら天井を待つことにした。普段あまり読む機会が無いためか、思いの外集中して読み込んでしまう。その間にも耳に入ってくる天ぷらを揚げる音、聞いているだけで口の中が今にも洪水になりそうだ。

新聞を半分ぐらい読み進めたところで、注文した天井が店員により運ばれ、目の前に置いてくれた。

「お待ちせいたしました、こちらカスタム天井になります」

抑えきれない食欲に抗いつつも、まずはカウンターにある箱から割り箸を取り出し、手を合わせ、食への感謝の合掌をし、自分だけの食事を楽しんでいく。

まずは見た目を楽しむ。井には黄金のような衣を羽織った天ぷらたち、下に敷き詰められた純白の白米との見事なコラボレーション。見た目を楽しみ、さっそく食べ進めていく。

「まずは卵からですね」

卵を一口食べてみる。次の瞬間、私は驚かされた。

「この卵、半熟卵なんですか!？」

てつきり固ゆでの卵かと予想していたのに、噛んだ瞬間に半熟で濃厚な黄身が口の中

に流れ込む。すると私は反射的に白米を2口ほど頬張った。噛めば噛むほど白米と黄身が見事に調和、ゆつくりと飲み込むと思わず至福の笑みがこぼれた。

「はあく。こんな美味しいのは反則的ですよ。」

あまりの美味しさに卵はすぐに無くなる。次に箸をつけたのは鶏天。井からはみ出るぐらいの大きさに圧倒されつつも口に運ぶ。やはり美味しい。

普通パスつきやすいことが多い鶏天なのに、絶妙な揚げ加減によりふつくと柔らかくジューシーに仕上がっている。これはご飯でなくともコシのあるうどんと一緒に合うに違いない。そして鶏天もすぐに無くなる。

すると店主の男性がカウンター越しから声をかけてきた、丁度天ぷらを揚げ終え休憩に入っているようだ。

「お嬢ちゃんいい食べっぷりだね、もう米もほとんど平らげたみたいだな」

店主の言葉を聞き自分の丼に目を移すと、既に白米の貯蓄が底を尽きかけていた。内心ご飯を大盛りにすればよかつたと残念がっていると。

「もうお客もアンタしか居ないみたいだし、特別に米のお替りしてやるよ」

えっ!? 周りを見渡すと、あれだけお客さんで埋まっていた賑わっていた店内は、今は私一人になってしまっていた。食べるのに夢中になり全く気付かなかった。

「なんか悪いですね、ご厚意でお替りまで」

「気にしなさんな、俺はこの天井を最後まで楽しんで貰いたくてよ。ほら、新しい井によそつといたぜ、ツユたつぷりでな」

「ありがとうございます！」

笑顔の店主から渡された井には、ツユが回しかけられていた。私は休めていた箸を再び手に取り、食事を再開した。

次に食べるのはこれまた厚く切られているレンコン。口を大きく開け噛みしめていく、食べた瞬間に耳に木霊する「シャキ」「サクツ」がたまらなく最高である。試しにカウターに備え付けられている塩を少々振りかけて食す。塩との相性も抜群だ。

お替りでいただいた白米も、美鈴の口に掃除機のように吸い込まれていく。

レンコンを片付け、最後はタケノコ天を頂く。こちらもレンコンに負けず劣らずの触感に、タケノコの香りが鼻を突き抜けていく感覚になる。最後にはツユに浸かっているご飯を豪快に掻き込んでいきそして。

「ご馳走様でした」

店主とこのお店、そしてすべての食材への感謝を思いをこの9文字に込め合掌をした。

合掌を済ませ、カウター席を立ち、会計がある店の入り口へ向かう。果たしていくらになるのだろうか？値段を予想しながら会計を待っていると、会計担当の女性が金額を

告げる。

「カスタム丼がおひとつで、計500円になります」

「や、安い！あつ！」

あまりの安さに思わず言葉が口に出てしまい、慌てて口を両手で覆った。私は少し恥ずかしくなり、頬を赤めた。店員にお気になさらなくてもという目線を送られつつも、咲夜お手製の財布から500円を取り出し、店員に渡し、感謝を述べてから赤い暖簾をくぐり私は店を出た。

すると店から店主が出てきてこう言った。

「今日がありがとな。そういやお嬢ちゃんはその紅魔の館の門番じゃないか？」

「はい、いかにも。今日は休日のため来店しました。あの天井とても美味しかったです。

また今度はお嬢様たちをお連れして来店しに来ますね」

普通の人間の店ならば、レミリアお嬢様やフラン様の名を出したら大抵は入店を拒否される。理由は色々あるが、やはり吸血鬼というのが一番の原因です。だけど店主は笑顔でこう返した。

「おうよ。そんな時は腕によりをかけて振舞うぜ」

この返事に私は満面の笑みで返し、私は店を後にした。

その後店の店主が、紅魔の門番が認めた味と新たな宣伝文句を里に流したことによ

り、あの天井屋は以前よりも大盛況だと店主からの手紙が送られてきた。

「私は何もしてないんですけどがね・・・」

そう思いながらも、店の繁盛を喜んでいた私だった。大きなあくびをし「さあ、次の休みにはどんな飯屋に行こうかな。ああ、待ちきれないな」と

と気を抜いていると後ろから殺気を感じた。

「仕事中に休日のことを思いながらサボってるなんていい度胸ね」

正体は怒りに満ちた咲夜だった。

「ち、違うんですよ咲夜さん。これには深い訳が・・・」

「言い訳無用！目を覚まさせてあげる」

門番の断末魔は、霧の湖の向こう側にまで響いていたらしい。

「ぎゃあああああああ！」

第2話 太陽のパンケーキセット

幻想郷にもやってきた真夏の猛暑。それに加え雲一つない快晴、ギラギラと眩しい太陽が肌を刺激する。

私は今太陽の畑に向かってる。そう、まだ見ぬグルメを求めて。

「それにしてもこの暑さはまさに異変レベルじゃないですかね、全身から汗が止まらないですよ……」

日ごろの門番業務で暑さには慣れてはいるものの、夏の暑さは全くの別物。私のような妖怪でも堪えます。ああ、チルノさんを抱き枕にして寝ていたい。

紅魔館を出発して一時間が経とうとしている頃、ようやく目的の太陽の畑が見えてきた。しかし、よく見ると畑のすぐそばで、幽香さんが屋台のような小さな出店を出している。

「幽香さんのお店から、ただならぬ未開グルメの気を感じます。これは行くしかないですね」

昂る高揚感を抑えつつ、私は目的のお店に到着した。

遠くから見た通り、お店はお祭りにある屋台ぐらいで、近くには白いテーブルと椅子

が一脚、そして備え付けのパラソルがあるイートスペース以外は何も見当たらない。しかも肝心の店の名前がないため何を扱っているのも分からない。

私は店内にいる幽香さんに、疑問を全て聞いてみることにした。

「あのー幽香さん」

「あら美鈴いらつしやい。あなたが来るなんて珍しいわね、どうしたのかしら？」

「いやあ今日は休日です、散歩をしていたところなんですよ。そしたらここにお店があつたので寄ってみました」

「なるほどね。ここは私が不定期でやってる、自家製パンケーキを振舞うお店なの」

色々聞いてみたところ、幽香さんは畑で育てた果物を、人間に食べてもらいたく今日から始めたそうで、メニューはその日採れた果物の盛り合わせパンケーキの1種類だけ。ちなみにオープン初日のメニューは、「苺とブルーベリーのパンケーキ」らしい。しかも私が初めてのお客さんとのこと。

早速パンケーキを注文した。

「出来るのに時間がかかるから、椅子に腰掛けて待っててちょうだい」

そう促され、パラソルの日陰になっている椅子に座り帽子を脱ぐ。微量ではあるが、少し涼しく心地いい風が吹いてくる。

「ふわぁ。疲れたからか眠くなってきた……まし……た……」

く数十分後く

「……ん。……りん。起きて美鈴」

「むにやむにや、はっ。幽香さん、私としたことがいつの間にか寝てしまいました」

「まあいいわ、いつもの美鈴らしくて怒る気にもなれないわ」

まあ確かに私の居眠り癖は紅魔館だけじゃなく、幻想郷中に知れ渡っているけども、せつかく作ってもらってるのに眠るなんて、早くこの癖治したい。

考えていると幽香さんは、一度店の中に行き、再度こちらに戻ってきた。しかも左手には出来立てのパンケーキを持って。

「居眠りした自分を責める前に、私自慢のパンケーキ食べなさい。丁度出来たところだし」

「ありがとうございます！」

目の前に運ばれて姿を現したのは、私の手のひらぐらいの大きさのパンケーキが二枚、上には少量の生クリーム、そして周りには苺とブルーベリーが程よく散りばめられている。

出来立てとあって、いい匂いが広がる。

そして私は手を合わせ合掌し、ナイフとフォークを手に取り食べ進めていく。

パンケーキを切ろうとナイフを入れると、「これ柔らかすぎませんか!?まるで吸い込

まれていくように入っていきます」あまりのふんわり感に思わず声のでてしまった。「そうでしょう、柔らかくするための材料の配合と、最適な火加減を見つけるのに苦労したのよ」

幽香さんの苦勞を聞きつつも、一口サイズにカットし、少しのクリームと果物を乗せ、フォークで刺して口の中に運ぶ。

ゆつくりと味わっていると、口の中に広がる幸せを感じる美味しさ、意外と想像以上に酸味の強い苺とブルーベリーだけど、生クリームに包まれることにより酸味が抑えられていますね。この暑い中でもこんな美味しさを感じることに深く感動、美味しすぎて涙が出そうになります。

「美味しいですーこれ咲夜さんの作るよりも、あつ、お世辞じゃないですからね」

「あら嬉しいわね、近々レミリア達に作って差し入れしに行こうかしら？」

他愛のない世間話などをしながらも、二口目はパンケーキ単体だけ食べる。これにも驚いた。ほんのり苺とブルーベリー酸味が舌に伝わる。どうやら生地練りこんでますね。しかも強い酸味が生地を殺さず、上手いこと調和されている。これだと万が一生クリームと果物が無くなったとしても、単体だけでも美味しく食べられるように工夫されているとは驚きました。

「そうだ、とても新鮮なフレッシュジュースもあるの、よかつたらお供にいかがかしら

「？」

「丁度乾いた喉を潤したかったんですよ。お願いします」

なんとジュースまであるとは、しかも幽香さん自家製の。前に頂いたメロン、とても甘さが凝縮してた記憶がありますね。

ジュースを待ちながら食べ進めていたらいつの間にかパンケーキを平らげた。それを見計らったかのようなタイミングで、幽香さんがジュースを運んできた。グラスに注がれているジュースは、少し薄い赤色をしている。ご丁寧にもストローもさしてある。何の果物かを予想しながら一口飲んでみる。

「うーん、すつきりとした甘さと爽やかな後味。それにこの甘さ、砂糖のような強い甘味じゃないですね」

「その通り砂糖は一切使っていないわ」

「となるとこんな甘味があつて赤い果物……。さくらんぼや苺じゃない、なんだろう」
砂糖を使わずにこんな甘さが出せる果物が考えてもみつからない。せつかく涼まった頭がオーバーヒートしそうになります。そんな私をみかねて幽香さんは口を開いた。

「正解はスイカよ。今の時期にピッタリでしょ。夏がヒントだったのに見破れないなんて、まだまだだね美鈴」

「そこまで言わなくてもいいじゃないですか、酷いですよ」

幽香さんの冗談混じりの回答に少々拗ねてしまったものの、この暑さもあり、残りのスイカジュースを一気に飲み干して思わず「ぶはあく」と声が出てしまいました。そして私は脱いでいた帽子を被り、お会計をして帰る事ことにした。

「お会計お願いします」

「今日のパンケーキとスイカジュースのセットで、合計は500円になります」

人里のパンケーキ屋さんでもセットで800ぐらいはするのに。友情価格と聞いてみたものの違うとのらしい。この安さの秘密は何だろう？

「安さの秘密は特にないわ。ただ私はこの畑で育てたものを皆に食べて貰いたいから、ただそれだけ」

理由を聞いていくと、人間に恐れられていると誤解を解き、少しでも人間と交友を築いていきたいと願い、このお店を季節限定で開くことを決心したとのこと。その後会計とちよつとした会話を終え、来た道を帰る。

相変わらずの暑さが付きまとう帰り道、幽香さんのあの言葉が私の中でずっと引っかかっている。人間から距離を置かれている花の大妖怪、でもとても交友的な一面もあるし、危害なんて加えない。

「なにか幽香さんの手伝いが出来れば、あの味を皆に知ってもらいたい。でもどうすれば……。あつそうだ、あの人に頼んでみましょう」

〜一週間後〜

やけに蒸し暑い朝方、まだ眠たい私は、目をこすりながらも、いつものように紅魔館の門番をしていると、前方から白い日傘を差した幽香さんが歩いてきた。幽香さんが紅魔館に来ること自体あまりないのに一体どうしたのだろうか。

そして私の目の前になると開口一番こう聞いてきた。

「もしかしてあなたのおかげなの？」

私はこの言葉の意味を理解していながらも、遠回しに「えっ、何のことですか？」と白々しく答えた。

「あなたが店に来た翌日、多くの人間がお店に来てくれたの。私は宣伝も何もしてないから不思議に思ってお客さんに聞いてみたら」

「えっ、この文々。新聞で新しく出来たパンケーキ屋があるって特集されていて来たの」これを聞いてすぐさま新聞を確認した幽香さん。そこには「あの紅魔のMさんが度肝を抜かれた優しき大妖怪のパンケーキ」と書いてあり、そのMが私だと見抜き、思わず涙を流したとのこと。

その日からお店は大繁盛し、昨日までお客が絶えなかつたらしい。そしてお店がお休

みの今日にお礼を言いに来たらしい。

「あなたには感謝しきれない。おかげでリピーターも増えて、しかも私の育てた野菜や果物を使いたいと、甘味処の方と契約されたの。本当にありがとう美鈴」

「私はただ幽香さんのあの言葉を叶えてあげたくて、行動に起こしただけですよ」

その後私に深々と頭を下げて、太陽の畑に向かっていった。その後ろ姿感じた「氣」に、もう寂しさは微塵も無くなっており、代わりに幸せな「氣」が感じ取れた。

「幽香さん、頑張ってくださいね。おっと、そろそろ朝食の時間ですね。咲夜さん、今日は何を作っているのかな」

朝食のメニューを想像していると耳元から「あら、そんなに楽しみなのかしら美鈴」とツンとした声が聞こえてきた。

「ひゃっ、咲夜さんいつの間にな?」

不意を突かれた私は、覇気のない声が出してしまった。

「幽香と話していた頃からよ」

「もしかして全部聞かれてましたか」

「ええそうよ、でもあなたの選択は間違っていないわ」

珍しく咲夜さんに褒められて、少しではあるが、嬉しくて口角が上がってしまった。しかも目の前で。

お仕置きされると思いましたが、返答は違いました。

「今日だけはあなたの頑張りに免じて許してあげる。さあ、朝食が冷めないうちに行くわよ、お嬢様達がお待ちよ」

「分かりました。ちなみに今日のメニューは？」

「あなたが好きな私特製のパンケーキよ。勿論食べるわよね？」

「勿論です！ 食べないという選択肢はあり得ません」

ただ私は、あの時食べた幽香さんの思いが詰まったパンケーキとジュースの味は、一生忘れません。

だって、私が認めた幻想郷！ 美味しいパンケーキセットなのですから！